

## 6. 英国 CTI Centre を利用して

### —WWW Virtual Library の Men's Issues Page を読む—

瀬 田 智恵子 (メディア教育開発センター)

キーワード：CTI Centre, WWW Virtual Library, The Men's Issues Page, 離婚家庭、父親、ジェンダーバイアス、電子図書館の可能性と限界、コンピュータトレーニング

#### 要旨：

近年の情報通信技術の進展は、我が国の教育改革の要請とあいまって、教育の分野にも大きな変化をもたらし、高等教育の一層の充実という文脈の中で「遠隔授業」「通信制大学院」などマルチメディアを活用した新しい教育の形態を可能にしている。

イギリスにおいては、1989年以来 CTI (Computers in Teaching Initiative：教育におけるコンピュータ活用)と呼ぶシステムの下に、専門領域別に24大学が CTI Centre となり、高等教育におけるコミュニケーション&情報テクノロジー (C & IT) の活用を目的に活動をしている。

本稿では、CTI Human Services の Social Work on the Web に所蔵の、The World Wide Web Virtual Library の中の Men's Issues Page から、特に Fatherhood と Single Dad Index に見る「家族の中のジェンダー」の概観を試みた。

The Men's Issues Page に現れた父親の問題で目立つのは、「男は仕事」という役割期待を持つ故に、男性が父親として直面するジェンダーバイアスである。専業主夫、離婚後の扶養料負担、子どもの監護権、伝統的な性役割分業観に基づく裁判所命令、悪用される女性のリプロダクティブ・ヘルス・ライツなど。

「男女共同参画」の推進という国際的な取り組みの中では、「女は家庭」という役割期待を担う故の、家族の中の女性の不利益に焦点が当てられがちである。しかし、今回の試みを通して、家族という枠組みの中で男性にとってのジェンダーバイアスも決して小さなものではないことを知ることが出来た。

また、本稿の作成作業を通して、時間的・空間的制約を越えて資料へのアクセスが手軽にできる、比較的 up-to-date な情報を得易い、などの The Virtual Library のメリットとその限界を体験できた。

#### 1. はじめに

「情報化」という言葉が使われ始めてすでに久しい。すでに、1987年に公にされた「臨時教育審議会答申」の中で、「情報化」「国際化」「成熟化」が、近年の社会状況の変化を示すキーワードとして使われている。

しかし、最近の情報通信技術の進展は、経済・産業界のみならず、教育改革の要請と相まって、我が国の教育界にも大きな変化をもたらしている。高等教育の分野においては、「高等教育

の一層の充実」という文脈の中で、「遠隔授業」「通信制大学院」などマルチメディアを活用した新しい教育の形態を可能にすべく、「大学審議会答申」が昨年、つまり1997年12月18日に出されたばかりである。

我が国に比べて、Open & Flexible Learningにおいては一日の長のあるアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなどでは情報通信技術を活用した高等教育の実践も既に珍しいものではなくなっている。昨年（1997年）7月に提出された“Higher Education in the Learning Society”（学習社会における高等教育）と題するイギリスのDearing Report（デアリング報告）では、高等教育の質を維持するためにC & IT（Communication & Information Technology：コミュニケーション&情報テクノロジー）の一層の活用を国家的な課題としている。

このような中で、本稿は、次の2点を目的に試みた作業の報告である。

- (1) World Wide Web Virtual Library を利用した、インターネットサーチ中心の資料収集によるペーパー作成の可能性の模索
- (2) イギリスのCTI Human ServicesのSocial Work on the Webに所蔵の、The World Wide Web Virtual Libraryの中のMen's Issues Pageから、特にFatherhoodとSingle Dad Indexに見る「家族の中のジェンダー」のレビュー

## 2. イギリスのCTIについて

CTI (Computers in Teaching Initiative) は、大学教育の改善をするために、the Higher Education Funding Council（高等教育基金）からの財源により、1989年に発足した。目的は、講義に活用できるInformation Technologyを紹介し、学習のツールとしてのコンピュータに対する認識を高め、ITの教育的効用を評価することである。

CTIは、24の大学から構成され、オックスフォード大学(Oxford University)に設置されているComputers in Teaching Initiative Support Service (CTISS)が、大学教育におけるコンピュータ利用に関する活動のフォーカルポイント(focal point)の役割を持って連絡調整している。24の大学は、それぞれ専門領域別のCTIセンターとして機能している。(表1を参照)

## 3. CTI Human Services (ヒューマン・サービスに関するCTI)

CTI Human Servicesは、サウザンプトン大学(University of Southampton)に設けられHuman Servicesのウェブページを開いている。

Human Servicesに該当する適訳は見つけにくいだが、医療、社会福祉を含めておよそ人々の日常生活に関連のあるサービスをカバーしている分野と考えて差し支えないだろう。(http://www.soton.ac.uk/~chst/)

このページのコンタクトパーソンは、Centre CoordinatorであるAnn Wilkinson氏である。(e-mail:annw@chst.soton.ac.uk)

Human Servicesのウェブ上の大項目の1つがSocial Work on the Webであり、この中にGenderのリソーススペースも含まれている。(http://www.soton.ac.uk/~chst/webconn.htm)

Social Work on the Web のねらいとするところは、ウェブの冒頭に見ることができる。  
(<http://www.soton.ac.uk/~chst/webconn.htm> から引用)

「このページは、教員、学生、及び現場の人のためのリソースとなることを目的としています。面白い資料を見つけたときには変更します。リンクのすべては、ソーシャルワークの教授(teaching)やソーシャルワークの実践に資する教育、研究、訓練に関する情報のあるサイトに張ってあります。我々は、このページに関する皆様の意見に関心があります。何があなたの役に立ちましたか？我々は、関連する情報ソースを提供する努力をしており、violence, death and dying, counselling, sexuality のトピックに関する資料にリンクを加えたいと考えています。最新のものでよく整理された情報を持つサイトを提示していただけるときは、どうぞ Ann Wilkinson に連絡を下さい。」

Gender のページには、Women's Studies on the Internet (インターネット上の女性学)、Women's Studies (女性学)、The Men's Issues Page (男性問題のページ)、Centre for Educational Technology (教育工学センター)、The Commonwealth of Learning (学習連邦)、Womensnet (女性ネット) がある。

本稿は、World Wide Web Virtual Library からのリンク集である The Men's Issues Page (男性問題のページ) の記事の中から、「家族の中のジェンダー」に焦点をあてて要約し、コメントをしたものである。

#### 4. Men's Issues Page について

このページは、アメリカ人、デイビッド スループ (David Throop) が、1989年あたりから貯め始めたクリッピングを基に、1993年にオースチン大学コンピュータサイエンス学科 (Dept of Computer Science, University of Austin) のウェブ上に The Men's Issues Page を開いたことに始まる。1994年に友人のポール ビキシー (Paul Vixie) のウェブスペースに移動し、現在デイビッドは、WWW Virtual Library の Mens Issues のメインテナーになっている。

これまでのところ、このページは、友人のデブ グロス (Dave Gross) の協力の下に、デイビッドの個人的なビジョンと、努力によって賄われているが、ニュースメディア界からも注目され、1日に約7500件のヒットがある。

Men's Issues Page について、制作者のデイビッド スループは、次のように言っている。  
(<http://info-sys.home.vix.com/men/admin/about.html> から引用)

使命：

百科事典的に、いくつかのメンズムーブメントを網羅する

目標：

- (1) メンズムーブメントに関する団体、書籍、定期刊行誌、ウェブリンクス及びその他の関連リソースの総合的なリファレンスリストを整備する。

- (2) メンズムーブメントに関係のある統計、研究、ビブリオグラフィーのオンライン リファレンス ソースとしての役割を果たす。
- ① 特に、作家、研究者、立法者、運動家、及び訴訟関係者に正確な情報と、オリジナルソースへのリンクを提供する。
- ② 特に、父親役割と父親不在、虚偽告訴、単親の父親（子どもの扶養、監護、訪問）の分野での特別なニーズに関するトピックを扱う。

The Men's Issues Page に収蔵されている主要コレクションは、表2の通りであり、全部で1064のトピックが入っている。

## 5. Men's Issues Page の中の父親

The Men's Issues Page に収蔵されている1064のトピックの中から、父親の存在意義、家族からドロップアウトした父親、子どもからの疎外感に苦しむ離婚後の父親、法廷の前例主義がもたらすジェンダーバイアス、母親に有利な生活時間統計、「母親は監護権を、父親は養育費負担を」の現実とその対策、離婚後に母親（前妻）が父親（前夫）を子どもに会わせない理由、を中心に読んだものの中から典型的なもの各1—2編を選び、我が国の問題に引きつけてコメントを試みた。

選んだ記事は下記の13編である。

(1) 悪い男性は男性不在よりももっと悪いのか？ (Is a Bad Man Worse than No Man at All?) (2) 父親を家庭に再び結びつける (Reuniting Fathers With Their Families) (3) 父親の肖像 (Portraits of some fathers) (4) 父親—子どもたちから遮断され、無関心のように感じる (Fathers-perceived as detached from or uninterested in their children) (5) 男性が自分の子どもと過ごす時間 (Time that men spend with their kids) (6) わたしだって良い親なのだ—父親は差別されるべきではない (I, Too Am a Good Parent-Dad should not be discriminated against) (7) 法廷におけるジェンダーバイアス (Gender Bias in the Courts) (8) 誰が監護権を獲得するか—統計 (Who GETS Custody-Stats) (9) 父親と、子どもの扶養 (Fathers And Child Support) (10) 私は人生全部の新規まき直しを余儀なくされた (Forced to Start my Entire Life All Over) (11) アメリカ/カナダ国境を父親が子ども連れて旅行をするとき (Fathers Travelling With Children Across US/Canada Border) (12) 差別と戦う父親：家庭が崩壊しているときや離婚中に『すべきこと』『してはいけないこと』(Dads Against Discrimination: Do(s) & Don't(s) during family breakup or divorce) (13) 調査—父親を排斥する理由 (Survey: Getting rid of the father)

(1) 「悪い男性は男性不在よりももっと悪いのか？」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/nofather/articles/howbad.html> から)

ここには、「両親がばらばらになったら、子どもにとっての暮らし向きは悪くなるのか？例えその父親がダメな父親でも？わたしはそれを知りたい」という書き出しで、典型的な事例をフィ

クシヨンの形で紹介している。

(要旨)

前夫との子どもが2人、現在の夫との子どもが2人（4カ月と2歳）いる20代後半の女性が、アルコール依存症で暴力をふるう夫と別れて、虐待される女性のためのシェルターに入所を希望している。子どもと家を出たが、夫が高給のため、福祉の対象にはならない。そこで、彼女は働きに出たが夫が職場にやってきて仕事をダメにしてしまう。本当は夫と別れて福祉で生活するのではなく、夫が飲酒と暴力をやめることが彼女の望むことである。

ここで、彼女が夫と離婚したら、子どもの生活は大きく変わる。泥酔した父親が家の周りにいないのは、改善点である。始終喧嘩し、殴り合いになる両親を見ることもない。

しかし、母親は働きに出るので子どもの保護監督はしにくくなるし、保育所も一流ではあり得ない。金銭的には厳しくなる。父親はしばらくは養育費を払うだろうが、父親の多くは離婚後は失踪してしまうことが考えられる。それで、父親の居ない家族のためのプロジェクトにはいることになるが、学校教育の質はグッと低下する。

これまでは、家ではどんなにダメな父親でも、自分は給料を持ってきてやっているというプライドがあった。離婚後は、子どものために金を稼ぐのではなく、Harris Count Social Serviceに払うためになり、家族の中での父親の位置はずっと下がってしまう。父親は、子どもに学校でガキ大将に立ち向かう方法、野球の仕方、仕事を持つことの誇りなどを教えられない。

母親は新しいボーイフレンドを作るだろうが、これは、子どもたちがあらゆる種類の虐待を受けるといふ、前よりも大きなリスクを負うことにもなる。子どもたちの生活は非常に悪化するし、ときには、そのコミュニティーがリスクの大きなものであることも多く、ちょっとジャンプしただけで犯罪者に成長する。

女性が離婚したときに利用出来るリソースは、シェルター、緊急福祉電話、緊急フードスタンプなど沢山あるが、これでは「家族を、フライパンから火の中に放り出すのを助けている様なもの」である。本当に重要で必要なのは、夫に大酒飲みをやめさせ、人間らしい人間にするような機関のリストの充実の方である。

この事例の趣旨とするところは、どんな夫（父親）であれ、子どもにとっては他のどの男性よりもずっと価値のある人だという現実である。にもかかわらず、「男は仕事」という社会的な枠組みの中で、家族の危機にある「経済力のある」男性が「父親の座」を取り戻すためのプログラムは、見過ごされ勝ちであることが、読みとれる。経済力のない女性（母親）を援助するプログラムが整備されても、それだけでは家族の危機は解決しない。経済力はある、家庭人としての役割を上手く果たせない男性（父親）のための援助プログラムも必要なのである。

(2) 「父親を家族と再び結びつける」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/nofather/articles/zubaty-miller.html>) Stuart A. Miller and Rich Zubay 作

(要旨)

刑務所の受刑者の85%、高等学校の中退者の78%、10代の妊娠女性の82%、ドラッグとアルコールの乱用者の大多数が、母子家庭の出身である。父子家庭の出身は1%以下である。問題児は単親家庭ではなく、特に母子家庭に関連しているように見えるが、母親が悪いのでも、父親が悪いのでもない。

この危機に対応する連邦および州政府のポリシーは、父親を家庭から追い出し続けている。子どものいる離婚の80%以上が母親のみの監護権 (Sole-mother-custody) となり、福祉ケースの場合は「家庭の中に男性不在のルール」「母親のみの監護権の推定」が付いてくる。われわれは、ポリシー、実践、訴訟手続きを変え、家族の中に父親を含めるようにしなければならない。

養育には母親の方が良いという盲目的な信奉がいかに妥当性を欠いているかは、母親と同居している子どもは、両親と居る子どもの375%以上も情緒面、行動面で専門的な治療を受けている等の社会調査の結果からも明白である。

別の調査では、実母が子どもに身体的な虐待を加える率は実父による場合の2倍である。また、大多数の子どもは、母親が新しい生活で選んだ次の男のせいで虐待を受けている。

データは、子どもを母親とだけ置くことは子どもにも社会にも不利益をもたらしているようなのに、なぜ母親と同居を支持する政策を変えようとししないのか。われわれの常識は麻痺してしまったのだろうか。

第一次世界大戦が終わるまでは、アメリカの法律と裁判所は、離婚家庭の子どもは自動的に父親に付いていた。世界中の殆どの文化で、何千年もの間子どもは父親に付けていたのは、それが上手く機能するからである。子どもを最強の保護者に託せ、男の子に伝統的な男らしさを教えることが出来る。今日では、保護者であり教化者としての父親の重要な役割が忘れ去られてしまったようだ。

ここ30—40年ほどに、アメリカで父親が廃棄されたことはかつて無かった。残念ながら、母親だけが親になり得、父親の本質的な役割を無視するかぎり、われわれの子どもたちはリスクを負っている。

何が必要か。天にまします我らの父よ、そして地にいる父親たちよ、それから父親を価値あるものとしている社会よ、父親たちを家族に入れ、関わらせ給わんことを。

前出の事例と同様、ここでも父親の価値が強調されている。作者は、「子育ては母親が」という役割を前提とした監護権の決定方法は、子どもの健全育成には機能しない、「だから父親だ」という視点で発言している。しかし、母子家庭の教育機能を低下させている要因に、「女は家庭」というシステムがもたらす母子家庭の不利益（生活を維持するに足る職業生活、子育て支援の

不足など)に言及していないのは、公平性を欠いていると言わざるを得ない。

### (3) 何人かの父親の肖像

(<http://info-sys.home.vix.com/men/nofather/articles/portrait.html>)

ミズーリ州の市刑務所でカウンセラーや保護監察司をしていた Dean Hughson が、担当したケースを基に家庭から廃棄された父親を語っている。

#### (要旨)

- ①ブルースは34歳だが、16歳から飲酒を続けているので65歳に見えるホームレスで、飲酒や微刑の者を対象とする刑務所で過ごしていることが多い。  
20代には女性と同棲し3人の子どもがいるが、酒が基で家出をし、10年来会っていない。ある夜泥酔し道路のスチームパイプの上で寝込んでしまったため、頭に大火傷をして死んだ。職務上、中流階級のティーンエイジャーになっている3人の子どもを探し出して電話をしたところ、返ってきた答えは「今度は、彼はなにをしたんですか。」それに答えると「彼の母親の電話番号を教えます。」だった。
- ②ポールは60歳の服装倒錯の売春婦で、男性は彼が男であると知らずに彼を5ドルで買った。彼には30年来会っていない2人の成人した子どもがいる。売春と政府からの年金で生活しているが、種々の違反で300回以上投獄された。クリスマスと感謝祭のときに合わせて逮捕されるようにして、ご馳走を食べ寒さをしのげるようにしていた。彼は心臓発作で死亡したが、家族は誰も彼の遺体を引き取りとうしないので貧民者用の墓地に埋葬された。
- ③バディは40歳の、富農の家庭の出身だった。18歳から25歳まで、結婚していて普通の生活をしていた。25歳のときに飲酒を始め、すぐにホームレスの大酒のみになってしまった。子どもたちは彼に会おうとしなかった。彼の父親は彼のためにフルタイムのカウンセラーを雇い、酒を節制させようとしたが上手くいかなかった。億万長者の彼の父親が、彼の子どもを育てた。

これと同様の事例は、我が国にも決して珍しいことではないのかも知れない。ときどき、相対的には豊かな国となった日本の社会問題として取りざたされる大都会のホームレスの人々の問題にも共通するものであろう。この人たちは、一家の生計の維持者としての「男役割」の期待に応えることが難しくなって家族から離れたのか、家族が離れていったのかは分からない。しかし、平均的なライフスタイルとは異なる父親は、多様な生き方、個の尊重といわれる現代でも、子どもには受け入れ難い。

### (4) 「父親—子どもたちから遮断され、無関心のように感じる」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/nofather/testimony/gone-dads.html>)

F.R.E.E. (Fathers' Rights & Equality Exchange: 父親の権利及び平等の交流の場) がメンバーに対して、何故「父親は子どもたちから遮断され、無関心のように感じる」のかをたず

ねた回答から。

(要旨)

ケース1

わたしが離婚してから2年が経った時のことだ。幼児である息子とコンタクトをとり続けるのは難しかった。相手が幼児であり、地理的に遠くに住んでおり、電話で話すことは出来ないで、安否を知る唯一の方法は前妻と話すことであった。でも、そうすると結婚生活で上手く行かなかったことばかりが思い出されるのだった。前妻に電話するのは、純粹に息子のことを話したいためであっても、彼女との会話は苦痛で、完全にやめてしまった。彼女がコンタクトしてくるときは、フラストレーションと怒りが頂点に達しているときで、そんなときはわたしは話をしたくなかった。

彼女は今でも息子(現在5歳)のことでわたしには関心のないことを言う。今でも、わたしにとってこれ以上不愉快なことは無いという風な電話をしてくる。息子は自分で電話で話せる年齢になったので、息子を直に電話に呼び出すこともできる。前妻と話すのはいまでも不愉快だが、前よりもずっと度々話しているし、子どもが大きくなるに従い、もっと、もっと、もっと話すだろう。わたしにはとても大事なことなのだ。彼女がわたしに対する辛辣な態度をやめて、われわれの息子のことだけを話せさえしたらと願う。電話で「彼」が何をしているのかだけを聞けさえしたら。子どもとだけ話せさえすれば。

しかしながら、子どもと話す唯一の方法は目で話すことだとわれわれみんなは知っている。

ケース2

その家族の中に新しい男が入って来たすぐ後に、わたしの子どもたちの母親が録音した新しい留守電は、こんな風に答えるようになった。

「こちらは、サラ、ジョセフ、ティム、ベティの家です……」

これらの4つの名前は(ここでは保護のために仮名)は、わたしの2人の子ども、その母親、それにわれわれの離婚1年後にやってきた男の名である。わたしが子供たちに電話をする度に、この新しい家族紹介を聞かねばならなかった。そして、わたしは子供たちに何の伝言も残してはいなかったということが分かった。わたしが子供たちに残した伝言は留守電から伝わらなかったのだ。

わたしを傷つけるために子どもを利用することにときとして、抗しがたいものがあり、わたしは辛うじて友人の言うことに耳を傾けねばならなかった。その友人は、誰もパパを替えることは決して出来ないと言った。これは、本当だ。特別な強い絆であり、わたしが受けた様々な嫌がらせは、意地悪をトーンダウンするのを助けてくれる家族と分かち合うことと、裁判所の命令による「よいコミュニケーション」のための弁護士によって、上手く処理することが出来た。

母親に監護権が行くことが通常の離婚家庭の父親は、子どもとコンタクトを取る権利がある



ものの別れた妻の存在がそれを難しくしている。直接的に子どもの世話をし、育てるのが母親である故に、子どもは母親のコントロールに措かれやすい。父親は「蚊帳のソト」の存在である。「父親の替わりは居ないのだ」という信念を持つことで、父親としての自分の存在を見出している。

(5) 「男性が自分の子どもと過ごす時間」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/nofather/articles/stats.html>)

「ある調査によれば、アメリカの父親は4歳の子どもの1日平均42分過ごし、母親は働いている場合でも平均11時間子どもと過ごしている」という書き込みに対して、デイビッド ギャロッドが回答している。

(要旨)

両親とも在宅しているときも母親のみの時間としてカウントしないかぎり、明らかに、こんなことはあり得ない。例えば、子どもが眠っているときも母親が世話をしている時間であって、父親が世話をしている時間ではないというように。(ああ、信じられないかも知れないが、わたしは統計学者がそうしているのを見てしまった!)

しかしながら、この分野の権威と目される人は、Population Reference Bureau (人口問題局)の人で、ここでは統計局の家計調査を利用している。統計局のデータは non-sexist (女性差別主義者でない) で non-political (政治色のない) と見られている。

最新の報告書は手元にないが、記憶では母親と父親のペアレンティングの時間差は1週間で10時間以下である……つまり、1日平均2時間以下である。まだ、在宅の母親もいることを考えれば、共働きの場合は平等なペアレンティングの時間にかなり近づくに違いない。

我が国でも、総務庁統計局が行う「生活時間調査」(正式には「社会生活基本調査」)の結果に見る父親の育児・家事参加の時間の少なさはときどき話題になるし、女性の実態が明らかに出来るような女性統計(ジェンダー統計)の作成も課題とされている。この記事は、それを思い起こさせるものである。

しかし、我が国の場合は、男性(父親)の方に不利となるバイアスのかかった統計とは言えない。実際、共働きの家庭でもどのくらいの夫(父親)が夜中に子供の世話を責任をもって、率先して分担しているであろうか。我が国で毎年更新される出生率の低下は、その答えに代わるものである。

(6) 「わたしだって良い親なのだー父親は差別されるべきではない」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/goodparent.html>)

(要旨)

離婚は現代生活では普通のこと、難しいものではない。しかし、未成年の子どもがいる

と話は違う。こどもは適切な親のところに置かなければならない。

わたしの場合も妻が離婚を希望するのは彼女の権利で異存はないが、子どもたちを育てる権利をわたしから奪う権利まであるとは信じ難い。わたしは、日常的なレベルで子どもたちの生活と関わることを期待してきたが、母親は子どもを連れて北部の州に引っ越したのでその権利も行使出来ない。

わたしは子どもたちの監護権を獲得すべく全力を尽くした。わたしが父親としても親としても申し分がないという証拠は否認されていないと思う。わたしの前妻もかなり良い母親だが、バイアスのない意見ではわたしの方がもっといい親だと言う点に異論はなかった。わたしは父親になりたい。

何世紀も前は、父親と母親は未成年の子どもの養育を平等に分担していた。産業革命以降、父親は日中は働きに出、子どもの世話は家に居る母親がフルタイムに行うことになった。このような状況下では、子どもの監護権者を決めるのはずっと簡単だった。これは、今日も真実であろう。

いまや、結婚した女性の大多数が労働市場に出ており、働く母親の増加に伴い子育ても変化した。第3者による保育の増加だけではなく、父親が子どもと関わる方法が決定的に変わった。父親たちは子育てに役立とうとさえし始めている。大多数の家庭ではまだ子育ての責任の配分に不公平があるのは事実だが、母親と同じくらいに子育てに参加している父親も多いし、男性がフルタイムの親になっている例も多い。

しかし、過去の歴史を反映して、子どもの監護権の係争では、母親が常に有利になる。どの州の法律も母親の方が監護権を持つ親として有利になる決定で満ちている。われわれのライフスタイルの変化を法律に反映する必要がある。

(中略)

……父親の方が監護権者としてふさわしいというケースを見たことのない弁護士の1人がわたしにたずねた。「しかし、あなたには彼女が不適格だという証拠はありますか」と。父親は監護権を獲得するために、そんなことを証明する必要があるのだろうか。

父親は、わたしのように差別されてはいけない。結審に3年かかった。裁判官は証拠の圧倒的な重みを見捨て、「わたしは子どもたちの母親です」と言う主張以外は何もない前妻に監護権を認めた。子どもたちの母親であるということが、わたしの方が良い親だと知っている共通の友人の証言全てよりも重く見えたようだった。

客観的には十分に資格のある父親でも、「子育ては母親が」という前例主義の裁判では、監護権を獲得するのは難しいという典型的な例である。その前提となるのは、「男は仕事、女は家庭」というステレオタイプの役割分業観である。

(7) 「法廷におけるジェンダーバイアス」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/studies/menwhoseek.html>)

(要旨)

監護権を要求しているアメリカの父親の正確な数字を得るのは難しい。理由は簡単で、「法廷で係争中」とか「監護権の要求」の定義の仕方なのだ。更に、「監護権」も、単独の身体的監護権、共同の法的監護権、共同の身体的監護権があり、共同監護権の場合も父親の住居が主たる居所になるのかなど。「法廷で係争中」にも同様の問題がある。

研究者は、父親が役割を放棄して死亡扱いにしない限り監護権を要求していると定義しがちである。

わたしの研究したところでは、われわれは、何人の父親が監護権を要求しているのかではなくて、監護権を獲得した件数とそのタイプを聞く傾向がある。わたしの経験では、監護権は獲得出来ないだろうと父親に警告してくれる代理人は殆どいない。インディアナ州では、父親の監護権は法廷での係争からではなく協議により獲得している。

インディアナ州では父親が監護権を獲得するのは、子どもが10代の反抗期に入って父親との同居を要求するときである。この場合には母親は選択の余地が殆どか全くない訳だが、子どもが父親と同居するのに合意する代わりに、母親は養育費は支払わないという協定を結ぶことが多い。これは明らかにガイドラインに違反しているにもかかわらず、法廷はこれを認める。

わたしは、ここ5年間監護権を獲得するのに全力を尽くしている父親を最低1ダースは知っているが、彼らは共同の身体的監護権や単独の身体的監護権は勿論のこと、共同の法的監護権でさえ決着が付いていない。

デイビッド ギャロッド

(8) 「誰が監護権を獲得するか―統計」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/studies/shoGets.html#mac-coby>)

(要旨)

これは、男性がいかに監護権を獲得できないかを引用したものである。

この研究はアリゾナ州で行われたもので、それぞれの親の希望と監護権の決定結果を示している。

父親の希望は：

共同の監護権が74%、父親の単独監護権が15%、母親の単独監護権が11%

母親の希望は：

母親の単独監護権が70%、共同監護権が30%

係争中の家族（父親は共同監護権を希望、母親は単独監護権を希望）  
母親が単独監護権を獲得が77%、共同監護権を獲得が23%

(9) 「父親と、こどもの扶養」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/tex-study.html>)

Texas Fathers for Equal Rights（平等の権利を求めるテキサスの父親たち）のリサーチ&インフォメーション コーディネーターが、783件の離婚について調査した結果である。これはテキサス州の新聞30紙に紹介されたという。

(要旨)

- ①783件の離婚のうち、監護権を持った父親の18.8%が子どもの養育費を受け取っていた。監護権のない母親は、子どもへのサービスを続けることを何も要求されなかった。
- ②単独の監護権を持った母親の96.8%が養育費を受け取っていた。5人に1人の父親が前の配偶者からの援助（assistance and help）を受けていたに過ぎないが、父親の5倍以上の母親が離婚後の助け（help）を受けていた。
- ③監護権のある母親に対する支払い裁定額は、子ども1人につき1カ月平均170ドルで、平均金額は253ドルであった。これには、医療費、保険、学校など現金での直接支払い金額は含まれていない。
- ④監護権を持つ父親への平均支払い裁定額は子ども1人につき1カ月11ドルであり、平均金額は18ドルであった。
- ⑤同意に関するデータ：別居の3年後に、監護権のない父親の80%は、離婚命令に従った。1年後、監護権のない母親の11.7%が全く支払いをしていなかった。

同じウェブページにある関連記事から

- ①監護権を獲得した男性の80%が、2年以内にそれを失う。
- ②離婚家庭の子どもの98%が、母親の監護権の下にある。
- ③アメリカの離婚した父親の33%が、離婚裁判の命令に反して、子どもとのすべてのコンタクトを前妻によって打ち切られている。
- ④離婚した父親の80%が子どもたちと意味のある関係を持ち続けようとする際にある種の嫌がらせを受けている。

(7)(8)(9)は、文字どおり「法廷におけるジェンダーバイアス」の例示である。母親は子どもの監護権者になって前夫（子どもの父親）からの養育費を得て生活をするが、父親は監護権を得難いのみならず、子どもとのコンタクトの機会も阻害される；養育費の支払い者としても父親には厳しいが、母親には寛大である；ということである。「男は働く人、女は家を守る人」の構

図が、はっきりと見えてくる。

(10) 「私は人生全部の新規まき直しを余儀なくされた」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/letters/graves.html>)

The Men's Issues Page の読者から、メインテナーのデイビッドへのメール。離婚により、子どもの監護権も職業も失った父親の気持ちを語っている。

(要旨)

12カ月前に、8回目の結婚記念日を祝った7日後に、わたしの妻は2人の子ども達を連れて出ていきました。虐待もしていないし、アルコール依存症でもない、浮気もしていない、口論もしていないのにです。

彼女は、結婚に疲れたので、自分自身の人生が欲しいのだと説明しました。いま彼女は27歳で、わたしが費用を出して4年制の大学のディグリーを取りましたが、それを使って仕事をするのを拒否しています。その時以来、わたしは300/wk.の自動車修理工の仕事を解職され、政府からの財政援助のおかげでカレッジに戻っています。

しかし、いまわたしは30歳で、カレッジの1年生で、勉強のために自由になる時間がほとんどないこともあり、子ども達には殆ど面会できずにいます。わたしは、ただ彼女のわがまのために、人生全部の新規まき直しを余儀なくされているように感じます。ときどき、わたしは自分の全人生の努力が何のためにもならないような気分になります。どんなサポートでもいいからそれが受けられれば大変嬉しいです。

(11) 「アメリカ/カナダ国境を父親が子ども連れで旅行をするとき」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/canada-travel.html>)

離婚に際して父親の希望に反して監護権が母親の方に行く、そのために何とか子どもを取り戻したいと行動する父親がいるであろうことは、想像に難くない。このエピソードは、そのような背景から生まれたのだろう。

(要旨)

これは、子どもの母親は同伴せずに父親が子ども達を連れてアメリカ/カナダ国境を越えて旅行をするときの注意である。わたしの夫は動転してしまった。これは、夫が初めて経験した性差別 (sexual discrimination) である。

わたしが背中をひどく捻挫して安静にしていることを余儀なくされたので、カナダにいる親類の高齢者を訪問するために、わたしの代わりに、夫が子ども達を連れて旅することに決めた。

カナダに着くと、カナダ入国管理官は、夫はわたしの許可の下に子ども達を連れて旅行をしているという旨のわたしの手紙を見せるように要求した。夫は、これでかなりうろたえてしまった。管理官は更にこのような手紙は法的には必要ではないものの、今後ともこのよう

な書類を持って旅行をすることを是非勧めたいと説明してくれた。わたしが1人で娘を連れて旅行をしたときにはこんな騒ぎは一度もなかった。情けない時代になったものだ。

離婚が日常的で、かつ、父親が監護権を獲得しにくくて養育費の支払い義務のみ厳しいところでは、子どもを取り返すための誘拐も稀ではないのであろう。幼児を連れ去った父親は、誘拐犯として疑われる。

しかし、これが日本の場合であれば、何人の父親が誘拐してまでも子どもの監護権を得たいと考えるだろうか。長時間労働、男性の生活技術の自立度などの理由で、母親が子どもを引き取ってくれてホッとしている離婚カップルも少なくないに違いない。

(12) 「差別と戦う父親：家庭が崩壊しているときや離婚中に『すべきこと』と『してはいけないこと』」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/resources/dad-do.html>)

差別と戦う父親 (DAD-Dads Against Discrimination)は、家庭が崩壊しているときや離婚中に「すべきこと」と「してはいけないこと」を作成した。

#### 裁判前

##### 「すべきこと」

- ①あなたが子ども達を愛していることを彼らに分からせること
- ②地域 (Local) の父親サポートグループを見つけること
- ③共同の小切手勘定や掛け売り勘定を打ち切りにすること
- ④家からビジネスの記録類は持ち出すこと
- ⑤クレジット会社には、離婚のことを通知すること
- ⑥必要な場合には、私書箱を借りること
- ⑦すべての開廷に出席し、ケース関係のすべての記事のコピーを保存すること

##### 「してはいけないこと」

- ①あなたの子ども達を避けること
- ②裁判所が命令を出さないのに、引っ越すこと
- ③妻の代理人を使うことや彼らから申し出たものにサインすること
- ④弁護士に質問をすることを恐れること
- ⑤「敗北主義者」の態度で弁護士を使うこと
- ⑥悪い代理人を更迭するのを恐れること
- ⑦州のルールによってあなたの子ども達を失うことに慌てふためくこと
- ⑧フェミニストのソーシャルワーカーを信頼すること
- ⑨どのような種類の自動支払いであれ、それに同意すること

#### 裁判中

##### 「すべきこと」

- ①子ども達に彼らを愛していると告げること
- ②筋の通った (reasonable) 決定は受理すること
- ③代理人の費用を憶えておくこと
- ④全ての命令申請と宣誓供述書を吟味すること

##### 「してはいけないこと」

- ①客観的な吟味の前にどんなものであれサインすること
- ②出廷をし損なうこと
- ③彼女が福祉で生活をしているのなら、妻であった者に金銭を払うこと
- ④曖昧な（例：「妥当な」等）訪問をうたっている裁判所命令を受理すること

#### 裁判後

##### 「すべきこと」

- ①「親の役割の時間」(Parenting Time) の訪問を続けること
- ②父親のグループをサポートし、婚姻法を改善すること
- ③前妻との直接のコンタクトは避けること

##### 「してはいけないこと」

- ①子ども達と離婚を回顧すること
- ②新しい関係をスタートさせることを恐れること

記述の(1)から(11)までのトピックの中で提示された「父親は監護権者になりにくい、養育費の負担は当然のこと」という現状で、父親が不利にならないためのノウハウである。問題の当事者である父親たちが、自分たちの経験を基に「心得集」を作成していることは興味深い。

我が国では、女性が離婚に際して不利にならないための民間の講座はいくつか見聞するが、男性のための同種の離婚講座はあるのだろうか？

#### (13) 「調査—父親を排斥する理由」

(<http://info-sys.home.vix.com/men/custody-divorce/studies/shayward.html>)

イギリスの父親グループの幹事が、何故父親達が子ども達との接触が出来なくなってしまうのかについてアンケートを行った。父親を排斥したいと願う母親側の理由として、28項目にまとめている。リスト化した目的は、「キーとなる問題を別々に分け、これらの問題にアプローチするのにベストの方法を検分するため」だという。

アンケートの結果

1. 母親は新しい生活をスタートさせたいと願っているので、父親をはずしたい。母親は父親よりも上手く行くかも知れない。父親は厄介者と見なされる。
2. 母親は父親から金銭/財産を取りたいと願っており、子ども達を取引の人質に使っている。
3. 母親は父親を憎み、子ども達を武器に使っている。
4. 母親は所有欲が強くて、全ての子ども達の愛情を欲しいと願っている。
5. 母親は、父親が子ども達に与える愛情/贈り物に嫉妬心を持っている。
6. 母親は自分自身の人生をうまく処理できない。どのような形であれ父親とコンタクトすることは母親には難しい。父親達が共通して言うことは、母親達は、鬱病に悩まされている。時には支払い (PMT) のことで、ちょっとした出来事から口論が爆発して敵意にまで至ってしまう。
7. 失望。母親は、彼には父親の価値がないと感じているので、子ども達を受け入れるに足らないと思っている。
8. 母親達は、他の女性達から扇動されて男性に対して敵意を持つようになる。  
特に、彼女がシングルマザーのグループに入っている場合にそうなる。
9. 母親は子ども達をコントロールするのに、面会権(access)を引き合いに出す。(「あなたがお行儀よくできないなら、パパに会えませんよ」)
10. 子ども達と会う短い時間のうちに彼らが喜ぶことを母親よりも沢山してくれる父親には、母親は太刀打ちが出来ない。
11. 子ども達は、母親がコントロールすることが出来る唯一のものかも知れない。そこで、子ども達の利益のためというよりは、母親自身の尊厳を高めるために子ども達を使う。これは、男性に多く見受けられるパワーの原理である。
12. 母親は、父親をいまだに好きなので、父親をコントロールする手段として子ども達を使っているのかも知れない。
13. 母親は、父親の新しいパートナーを間接的に罰しているのかも知れない。  
新しいパートナーが居さえしなければ、父親は子ども達に会えたのということを思い知るように。
14. 母親は、自立していて、彼女の子ども達の父親であること以外には男性が周りにいることを全然望んで居なかったのかも知れない(畏)。あるいは、彼女は結婚生活の間に自立心を勝ち取り、いまそれを実践しているのかも知れない。
15. よく言われるように、母親は、家、失業手当、その他の給付金を手に入れる手段として子ども達を見ているのかも知れない。父親は常に、この件では副次的なものであった。
16. ある女性達は、男性は自分の子ども達に関心がないと本当に信じている。
17. 母親は、彼女に対する父親の敵意はまた子ども達にも向けられていると決め込んでいる。  
そこで、父親を遠ざけることで子ども達を「守って」いる。
18. 母親は、父親とは違ったライフスタイルを持っていて、子ども達が父親のライフスタイル



ルを真似するのを望んでいない。

19. 母親には、自分の身内の人間がいない（外国人妻の場合に典型的例）のに、父親には家族がいるかも知れない。母親は、子ども達を「自分の家族」と見なしている。
20. 母親は、感情的には子ども達に依存している。そのため、父親に対して子ども達が抱く愛情は、彼女から子どもを奪うものだと思なしている。
21. 母親は、子ども達を自分の財産だと単純に考えていて、母親の「所有物」を渡す権利があると父親が主張していると思っている。
22. 母親は、父親の新しいパートナーが嫌いで、「母親」のライバルだと思なしている。それで、子どもに父親と会わせないようにしている。
23. 母親の新しいパートナーは、「パパ」として見てもらいたいのので、子どもが父親とコンタクトすることを望んでいない。
24. 子ども達が自分を置いて父親の方に行ってしまうことを、母親は恐れている。
25. 母親は、新しいパートナーに彼が自分の人生で唯一の男性であることを証明したいと思っている。
26. 母親は、壊れた家庭の出身で、親族間系を持続することが出来ないのかも知れない。
27. 父親は、忘れたいと思っている失敗した関係をいつまでも母親に思い出させる人である。
28. 母親は、新しい状況をスタートさせたか、あるいは現在の状況に困難がある。そのために、子ども達が父親に自分の状況を話して欲しくない。

父親からの共通している不満は、彼らの子ども達に会うために何マイルも旅をし、そのあぐく子ども達はそこには居ないということを知るだけに終わってしまうということである。ある場合には、先ず電話で確認する（そして、記録する）ことが出来る。また他の場合では、子ども達を隣人や近くの親類に託して、そこで落ち合うことによって母親との対面は避けることが出来る。

#### 予見出来る問題

関係に問題があることを示す最初のサインは、連絡が途絶え勝ちになるときである。あなたがまだ子ども達とコンタクトがあり、あなたがいつも得ていた情報を母親がくれるのを「忘れてる」のが分かったら、それは、何かがまずくなっているサインである。また、もしも母親が、「整頓したい」などの理由で彼女の家からあなたの持ち物を全部持ち出したかどうかを確かめるなど、非常に正確にかつ正式に行動し始めたら、それもサインである。実際、どのような態度の変化も注意深く注目する必要がある。

それに対してあなたが何かをする前に、その理由を考えること。彼女に質問をするなら、争いを招かぬような方法で、そうするとよい。争いが必至のようなら、出来るだけそれを長引かせるか、あるいは、誰かにあなたに味方して仲介してくれるよう頼むこと。もし、先延ばしすることが出来ないなら、事前に子ども達に当たってみて、臨む覚悟をすること。それが手の届かないことだとあなたが判断したら、出来る限り多くの味方を探すこと。味方の中

には、双方共通の友人、隣人、親類その他が入るだろう。いまあなたが話すことの出来るひととも入るだろうが、もしあなたが去れば切れてしまうだろう。子ども達とは、「もし君たちが困ったことで話したいことがあって、ママやパパに話せないことなら、君たちは誰それに話すことが出来るよ」と言っておくことは出来る。

このアンケート結果が、イギリスのものであるにもかかわらず、そして母親側からの意見を基にしたものであるにもかかわらず、(12)のアメリカの父親側の考え方と丁度表裏一体の観があることは、興味深い。

## 6. ま と め

### (1) 「家族のなかのジェンダー」に関して

当初、The Men's Issues Page の Fatherhood and Fatherlessness の中から、「子どもにとっての親としての役割の中で」「妻にとってのパートナー（夫）としての役割の中で」「家族の生計の担い手としての役割の中で」の家庭におけるジェンダーバイアスを概観することを期待していた。しかし、Fatherhood and Fatherlessness, とそれに関連する Single Dad Index から出てきたのは、アメリカでは日常的となった離婚に伴う「元家族におけるジェンダーバイアス」であった。

我が国で「家族の中のジェンダー」を語るとき、「夫（父親）の家事・育児参加」「老親の介護」「男の子、女の子のしつけ方」「妻（母親）の職業生活と家庭責任」などに言及されることが多いのではないだろうか。その意味では、予定とは異なる方向に進むことになった。

Gender Equality、「男女共同参画」の推進という国際的な取り組みの中で、「男は仕事、女は家庭」という役割期待の中で、ともすると女性の不利益に焦点が当てられがちである。しかし、今回の試みを通して、家族という枠組みの中で、男性にとってのジェンダーバイアスも決して小さなものではないことを知ることが出来た。

「子どもの監護権」をめぐる問題は、我が国に比べて Gender Equality の浸透していると思われるアメリカにおいても、社会（少なくとも裁判所関係者）も父親・母親も伝統的な性役割分業観に裏付けられた制度の支配下にあることを、際だたせている。

また、同じ The Men's Issues Page の中で、目立ったのは“Male Choice”の問題である。Male Choice の主な問題意識は、「女性にリプロダクティブ・ヘルス・ライツが認められているように、男性にもリプロダクティブ・チョイスを認めよ」ということである。つまり、「『子どもを、いつ、何人産むかを決定するのは女性の権利である』というのであれば、男性にも親になる権利、親になりたくない権利を認める必要がある」という主張である。罠にはめられた形で女性を妊娠させ、学業の中断を余儀なくされたり、一生養育費負担が付いて回るようになった男性の問題に焦点を当てている。望まずして父親にさせられそうなケースを含め、危機にある男性を対象に、ニューヨークにある非営利団体、The National Center for Men(P. O. Box 555 Old Bethpage, NY 11804, U.S.A.: Tel (516)942-2020: ncmen@teleport.com.) が活動している。しかし、ページ数の制約から Male Choice は、本稿からは割愛した。

## (2) 「The World Wide Web Virtual Library」の可能性と限界に関して

本稿を作成する作業を通して分かった、The Virtual Library のメリット、デメリットは次の点である。

### ①資料アクセスの容易性

まず挙げることができるのは、なによりも資料へのアクセスが手軽であるという点である。サーチする時間は多少かかるにしても、「図書館へ行く」「文献を探す」「関連文献を探す」「ザッと目を通す」「必要に応じて再読する」「必要に応じてコピーをする」などの作業との比較では、空間的、時間的、視覚的に、時として経済的にも非常に効率的と言える。特に、海外の情報へのアクセスに利点がある。

### ② up-to-date な情報の入手

次の利点として挙げられるのは、著作物として刊行されるものに比べて up-to-date な情報を得やすいという点である。特に、今回のような日常性に根ざした、人間模様がテーマの場合「いま」の「ナマの声」が重要であるが、WWW 上ではそれが比較的容易に出来る。

### ③情報の非恒常性

6 カ月にわたり CTI for Human Services を利用するうちに気付いた欠点は、情報が up-to-date であることとの引き替えに、ページの内容が変更しウェブ上から消えてしまうという不便さである。一定の容量の中に情報を所蔵するためには、定期的な更新はやむを得ないにしても、この特徴を念頭において作業をしないと情報の確認が難しくなる。この点が普通の図書館と決定的に異なる点である。図書館なら週刊誌類は別として、6 カ月で入れ替えてしまうことなどあり得ない筈なのだから。同様のことは他の例でも経験している。

### ④オーバービュー出来る情報の制約

電子図書館と配架式の普通の図書館とで、もう一つの使い勝手の違いは、前者では「本をパラパラとめくって全体の中から必要なものを取り出す」ブラウジングが不可能なことである。インデックスにはタイトルが載っていても、「タイトルから得られる情報」と「中身にザッと目を通して得られる情報」では、得るものは全く異なる。本の場合、自分の目的とする論文、記事でなくとも偶然に目に止まったものによって新たなヒントを得ることも可能である。丁度、街全体を小高い丘の上から眺めた時と壁の小穴から一カ所づつ見ていくのとでは、見える景色の印象とか得た知識は同じではないように。

電子図書館の利用には、これまでの配架式図書館の利用方法とは別のテクニックを必要とされているのではないか。

### ⑤メインテナーの恣意に依存した情報

今回利用したのは、WWW Virtual Library の Men's Issues Page であり、その経験をもってすべての電子図書館に当てはめることは危険かも知れない。しかし、いわゆる普通の図書館では、図書選定委員会など何らかの組織で複数の人々の判断により蔵書を充実していくのと比較すると、特定のメインテナーの恣意による情報の提供に負っているという印象は免れなかった。これは、ある種のテーマ図書館とも考えられるが、それは、時には可成りバイアスのかかった情報源にも成りうることも示唆している。

同じ WWW Virtual Library の中に Social Science の一項目として入っている Women's

Studies の場合は、主にアメリカ国内の大学や女性団体が所蔵するデータベースにリンクを張ったものが大部分を占めている。もともとが図書館の情報を開示している形なので、Men's Issues Page に比べて内容は網羅的で、バイアスは少ない代わりに全体を一つの図書館として見たときには主張に乏しいところがある。

また、試みに Literature の項にあるイギリスの中近世の文学作品に関するサーチをしてみたが、これもいろいろな大学に所蔵のデータベースをリンクした Archives であった。ただし、文献として希少のものにはプロテクションがかかっているものがかなりあり、部外者が利用するには制約がある。

#### ⑥ RBL (Resource Based Learning) の機会として

今回、CTI for Human Services にリンクされている WWW Virtual Library で学習できた内容は、イギリスのオープン・ユニバーシティ (The Open University) の D103 Society and Social Science: A Foundation Course (D103 社会と社会科学: 基礎コース) の入門書 (Preparatory Pack) の内容と似ている。つまり、A4 版 1 ~ 2 ページに収まる、社会問題に対する意識を喚起させる論文、記事などの集積である。それは、Virtual Library に掲載の記事が比較的短いために、断片的であると同時に分量にも制約があることとも関係している。社会科学の分野のキワモノ的なトピックなら、かなり内容のあるエッセイも書けるかも知れないが、理論的な構成や体系的な学問を目的にするものには限界があるのではないか。

ともかく、関心のある分野を次々とサーチしていくことで、自学自習が容易になるということに意味があると考えられる。

#### (3) Oxford University Computing Services (オックスフォード大学コンピュータサービス) のトレーニングコースの意味

オックスフォード大学は、CTI に関連して CTI Centre for Textual Studies (原典学 CTI) 及び CTI Support Service (サポートサービス CTI) の役割を分担しているが、大学独自の組織として Oxford University Computing Services (OUCS-オックスフォード大学コンピュータサービス) を持っている。

OUCS の行う様々な業務の中の 1 つに、ここの大学の教職員と学生なら誰でも利用出来るコンピュータ・トレーニングコースがある。コースは Introductory Courses (入門コース)、Computer Operating Systems (コンピュータ・オペレーティングシステム)、Electronic Mail and Networks (電子メールとネットワーク)、Computer Applications (コンピュータ・アプリケーション)、Computer Programming (コンピュータ・プログラミング) の 5 種類から成っている。

コンピュータ入門コースは、Computing for the Terrified (TE-コンピュータが怖い人のためのコース) に始まる 3 段階があるが、全くの初心者対象の TE の内容は 1 セッションが「用語の紹介」「キーボードとマウスの使い方」「コンピュータの動かし方の理解」「ワードプロセッサとペインティング・パッケージの使い方」「保存の仕方」「インターネットと World Wide Web 入門」で構成され、全部で 3 時間半のコースである。

筆者が当初この入門コースをウェブ上で目にしたときには、トレーニングコース全体のス

ケールに比べて、それが余りにも簡単で短時間であるために「へえー、こんなことを、わざわざ？」の感を免れなかった。

しかし、実際に CTI Centre をサーチし、WWW Virtual Library を利用して、ペーパーを作成する限りでは、この入門コースに網羅されている技能で十分間に合うことが実感出来た。この入門コースは、CTI Centre の利用促進の観点からは非常に重要な機能を果たしていると言える。

これまで調べた限りでは、教職員と学生を対象にしたこの種のコースは、オックスフォード大学のみならず大抵のイギリスの大学のコンピュータ・サービス部門に設けられている。CTI Centre を効果あるものにするには、誰しものが利用者となれるような仕掛けも必要であること、そのための専任の要員の確保が重要であることを教えてくれた。

#### (4) 女性のコンピュータアクセスの促進のために

筆者が The Men's Issues Page に出会ったのは、本務の研究としてイギリスの CTI をインターネットサーチしていたプロセスにおいて、Equal Opportunities という見出しが目に入ったからである。4 カ月後にはこの項目は消え、Social Work on the Web に変更されていた。最初から Social Work という見出しだったら、自分はアクセスしたかどうかは疑問である。

このことは、別の研究との関連で知ったイギリスの Anglia Polytechnic University の ULTRALAB の試みを想起させる。Dr. Stephen Heppell が所長をつとめる ULTRALAB では、「テクノロジーを活用することで、学ぶことをもっと楽しくする」ことを目的に小中学校も含めて教員のメディア活用能力の向上のための研究、研修を行っている。

研究員の 1 人の Ms. Carole Chapman は、“Carole on Gender” というタイトルの下に、Gender 関連のサイトにリンクを張り女性問題関連の Archives を提供している。その目的とするところは、女性のコンピュータ・アクセスとコンピュータ・リテラシーを促進することであり、その手段として女性自身が関心を持つテーマ、つまり女性の現状、問題などが有効であるという認識である。これは、イギリスの Manchester Metropolitan University や University of Nottingham で、成人の女子学生のための学問の導入として女性学 (Women's Studies) を取り入れている例と「手段としての女性学」という点で基本的には共通している。

今後、高等教育におけるマルチメディアの活用の要請を視野に入れば、そして、日本の女性教員のメディアリテラシーの現状を考えれば、女性のコンピュータ・アクセスを高めるような仕掛けは重要な意味を持っている。イギリスでは有効な「女性学」や「ジェンダー」が、日本ではどうなのかという問題は別にして、日本で通用するような手だては検討の価値がある。

#### 備考：

①参考文献は省略した。

②本稿の「5. The Men's Issues Page 中の父親」の各トピックのタイトルはウェブページのタイトルを訳したもので、タイトルの下にウェブサイトのアドレスを付けた。

③文中、□ 内の記述はウェブページからの引用、あるいはそれを基にした要旨である。□ の外の記述の部分は筆者の見解を表している。

④本稿の完成後、Human Services 及びその中の一項目である Social Work on the Web のウェブペー

ジの目次と内容に変更があることをここにおことわりしたい。

表 1

CTI Centre 一覧

(<http://www.cti.ac.uk/centres/index.html>)

- (1) CTI Accounting, Finance & Management (University of East Anglia)
- (2) CTI Art & Design (University of Brighton)
- (3) CTI Centre for Biology (University of Liverpool)
- (4) CTI Centre for the Built Environment (University of Wales College of Cardiff)
- (5) CTI Centre for Chemistry (University of Liverpool)
- (6) CTI Centre for Computing (University of Ulster at Jordanstown)
- (7) CTI Centre for Economics (University of Bristol)
- (8) CTI Engineering (Queen Mary and Westfield College)
- (9) CTI Centre for Geography, Geology & Meteorology (University of Leicester)
- (10) CTI Centre for History, Archaeology & Art History (University of Glasgow)
- (11) CTI Human Services (University of Southampton)
- (12) CTI Centre for Land Use & Environmental Sciences (University of Aberdeen)
- (13) CTI Centre for Law (University of Warwick)
- (14) CTI Centre for Library & Information Studies (Loughborough University)
- (15) CTI Mathematics (University of Birmingham)
- (16) CTI Centre for Medicine (University of Bristol)
- (17) CTI Centre for Modern Languages (University of Hull)
- (18) CTI Music (Lancaster University)
- (19) CTI Nursing and Midwifery (University of Sheffield)
- (20) CTI Centre for Physics (University of Surrey)
- (21) CTI Psychology (University of York)
- (22) CTI Centre for Sociology, Politics and Social Policy (University of Stirling)
- (23) CTI Centre for Statistics (University of Glasgow)
- (24) CTI Centre for Textual Studies (Oxford University of Computing Services)
- (25) CTI Support Service (University of Oxford)

## 表 2

The Men's Issues Page の主要コレクション

Major Collections

- \* Books-What Are Some Good Men's Movement Book?
  - \* Other Booklists
- \* Domestic Violence
  - \* Battered Men
- \* False Rape, Abuse and Molest Report Index
  - \* Of Adults
  - \* Of Children
- \* Fatherhood and Fatherlessness
- \* Health
  - \* Physical health-Mental health
- \* Organizations-Listings of Men's organizations
  - \* Elsewhere on the Web-Other men's issues resources
- \* Periodicals of the Men's Movements
- \* Rape, Violence and Abuse
- \* Single Dad Index
  - \* Child Support: Issues-Child Support: Economics and Statistics-Paternity-Visitation and Access-Custody-Missing Kids-Divorce-Alimony